

事項	りんごのモニリア病防除での「開花直前」散布において、チオファネートメチル剤（トップジンM水和剤）の使用は必要ない		
ねらい	平成17年以降のりんご病害虫防除暦において、「開花直前」のモニリア病防除剤としてE B I単剤のみの使用を指導しているが、今なおチオファネートメチル剤（トップジンM水和剤）も使用している割合が高い。この時期の薬剤散布でE B I単剤とチオファネートメチル水和剤を組み合わせても、モニリア病に対する防除効果は変わらないことが明らかになったので参考に供する。		
指導参考内容	1 モニリア病による発生初期の葉腐れ病斑に、E B I単剤「ヘキサコナゾール水和剤（アンビルフロアブル）、フェンブコナゾール水和剤（インダーフロアブル）」を散布した場合と、それぞれのE B I単剤にチオファネートメチル水和剤を組み合わせた場合とでは、病斑拡大抑制と分生子形成抑制の効果に差はない。		
期待される効果	「開花直前」におけるチオファネートメチル剤（トップジンM水和剤）の使用を中止することで、10 a 当たり1,600円のコスト削減が図られる。		
利用上の注意事項	1 本資料は平成20年3月1日現在の農薬登録に基づいて作成した。 2 農薬を使用する場合は、必ず最新の「農薬登録情報」(http://www.maff.go.jp/nouyaku/)を確認すること。 3 平成18年度の指導奨励事項「春期の薬剤散布回数を削減したりんご病害虫防除体系」の内容も合わせて活用する。		
担当部署 (担当者名)	青森県農林総合研究センターりんご試験場 病虫肥料部 (赤平知也)	対象地域	県下全域
発表文献等	平成19年度 青森県農林総合研究センターりんご試験場試験研究成績概要集		

【根拠となった主要な試験結果】

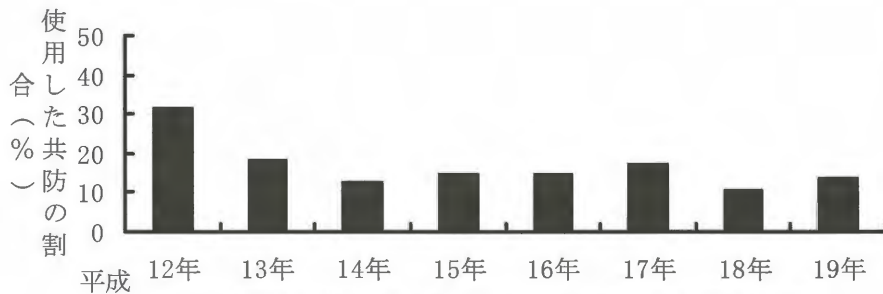


図1 開花直前におけるトップジンM水和剤の使用実態
(りんご共防連薬剤散布経過調書より作成)

表1 モニリア病による発生初期の葉腐れ病斑に対する各防除剤の効果

(平成19年 青森農林総研りんご試)

供試薬剤	調査時期	調査病葉数	指数別病斑分布割合					分生子形成葉率	防除価
			1	2	3	4	5		
アンビルフロアブル1,000倍	散布直前	64	89	11	0	0	0	0%	100
	散布7日後	63	75	25	0	0	0	0	
アンビルフロアブル1,000倍 + トップジンM水和剤1,000倍	散布直前	66	61	39	0	0	0	0	100
	散布7日後	65	52	48	0	0	0	0	
インダーフロアブル5,000倍	散布直前	65	52	48	0	0	0	0	98
	散布7日後	65	32	63	5	0	0	1.5	
インダーフロアブル5,000倍 + トップジンM水和剤1,000倍	散布直前	67	60	40	0	0	0	0	100
	散布7日後	61	33	62	5	0	0	0	
無散布	散布直前	67	63	37	0	0	0	0	
	散布7日後	65	4	2	6	34	54	95.6	

(注) 1 ポット植え「ふじ」の花そうに子のう胞子を接種し、発生初期の葉腐れ病斑（接種7日後）に供試薬剤を散布。

2 散布直前と7日後に下記の基準で葉腐れ病斑の大きさと病斑上での分生子形成の有無を調査。
発病指数 1：病斑の長径が5mm以下、2：6～15mm、3：16mm以上又は病斑が葉柄まで進展
4：病斑が花・葉そう基部まで進展、5：花腐れ



写真1 発生初期の葉腐れ病斑
(発病指数1～2)



写真2 発生後期の葉腐れ病斑
(発病指数4～5)